

藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院内科

芳 野 純 治

消化器癌の化学療法に関する主題はこれまで14巻12号「胃癌の化学療法」(1979年)と40巻7号「胃癌化学療法の進歩と課題」(2005年)の2号がある。前者は化学療法による胃癌の形態的变化を中心に、後者は胃癌に対する化学療法の有効性が増加したことを受けて企画された。

今回の主題は原発巣に対する効果判定を取り上げるようになった。そして、対象の臓器に食道と大腸を加えて消化管癌として広く取り扱うことや、化学療法と放射線療法との併用が行われていることより、「消化管癌の化学・放射線療法の効果判定と問題点」とした。企画小委員は小野裕之、鬼島宏、芳野純治である。

原発巣に対する効果判定を取り上げたのは以下の理由である。化学・放射線療法の進歩により、転移巣のみならず原発巣にも高い有効性が示されてきている。しかし、現在、化学・放射線療法の治療効果判定には、共通の用語を用いて客観的な腫瘍縮小効果を定義して転移性病変に対するRECIST (Response Evaluation Criteria in Solid Tumors) が国際的に用いられている。また、生検による寛解・遺残の判定は有用とされているが、原発巣に対する内視鏡やX線造影検査による評価は、客観性に欠けるとされ、非測定病変に位置づけられている。しかし、画像診断が量的にも質的にも高いレベルで行われている本邦においては、臨床試験以外の日常臨床の場で、原発巣に対する治療効果がclinical decisionの一助となっていることによる。

はじめの3論文と最後の論文で、化学・放射線療法の全体像を述べていただいた。すなわち、化学・放射線療法の現状(高張論文)、治療効果の判定方法として2009年1月に発表された新RECISTによる転移巣による判定(中村論文)、本

邦における取扱い規約(食道癌、胃癌)による原発巣による判定(中谷論文)、組織標本における効果判定(神論文)、である。中谷論文には原発巣を評価することの意義が示されている。

次に、食道癌、胃癌、大腸癌、悪性リンパ腫の原発巣に対する画像診断を用いた評価について記していただいた。食道癌では、「食道癌取扱い規約第10版(2007年)」で追加された内視鏡の効果判定規準の解説(三梨論文)と、EUS (endoscopic ultrasonography) による新しい効果判定(有馬論文)が述べられている。胃癌ではX線検査による評価(関川論文)、内視鏡検査とCTによる評価の対比(吉本論文)、造影EUSによる評価(岡田論文)について記載していただいた。吉本論文ではCTと内視鏡による評価の一致例が87.2%であり、不一致例の特徴が記載されている。岡田論文では腫瘍のvascularityにより評価する新しい視点からの方法が示された。今後の症例の増加を期待したい。大腸癌では内視鏡とCTによる評価を対比し、一致例は81%としている(鷹尾まど佳論文)。胃癌、大腸癌共に増悪例にCTと内視鏡による評価に差がみられている点が興味深い。また、鷹尾俊達らが悪性リンパ腫における原発巣の評価について述べている。

主題研究は治療前の食道癌からの生検組織標本を用いた遺伝子解析による有効性評価の予測(武藤論文)とリンパ節に対するEUS-FNAによる効果判定(安田論文)とした。

本誌がX線、内視鏡などの画像を重視する立場を明確にしていることより、画像診断による効果判定の論文では症例を数多く提示し、読者が症例を見ることにより効果判定について考えていただくことを期待して企画した。論文とともに画像を見ていただきたい。